

## コラム

### 景観を「たべる」楽しみとは

弘前大学教育学部教授 北原啓司

市町村景観行政担当者会議の場で講演することになり出席した際、ある町の担当の方が次のような質問をしていました。「私は企画課の所属で景観の専門知識があるわけではない。プロがつくったものに対してあれこれ言いにくいのだが……。」

各市町村で景観行政を担当されている方は、景観や色彩について専門的に学んだことのない方がほとんどだと思います。しかし、景観についての専門知識がない方が景観行政を担当することは決して悪いことではないと思います。

私は景観の専門家を景観を「つくる人」、景観の専門家ではない人を景観を「たべる人」という言葉で表現しています。なぜなら、景観の専門家ではなくても私達は景観をたべさせられているからです。

行政だけではなく住民も、景観をたべる人として良い景観をつくっていく必要があります。たべる人は自分達が身近に持っている素材が景観資源としていくらかでも使えるということを提供していく形で景観づくりに参加できます。「たべる」プロであるからこそ気づく景観資源＝宝物があります。大事なことは自分達も景観に関わることができるということを住民の方々に意識してもらうことです。住民の心がけ次第で景観が良くも悪くもなることに気づいてもらわなければなりません。たべる人達の役割はとても大事なのです。

この「景観をたべる」という感覚が行政には不足していると思います。景観の専門家ではないから、プロがつくったものに対してどうこう言えないというのではなく、気づく心や変だと思ふ心、これはおいしそうだと思う心を行政の皆さんに磨いてほしい。景観をたべる眼を地域の人達と共有することが景観行政で最も大事なことだと思います。行政の方には「つくる人」が「たべる」ことを忘れず、「たべる」側と同じ目線を持ち「これは気になるな」という発想である種のセンサーを輝かせる人になってほしいのです。

私は、身近な景観をたべながら育てていく人のことを「景観人」と呼んでいます。行政も住民も景観人です。景観をたべる景観人を育む教育こそ、景観行政の切り札です。景観をつくることを担える人材、景観をたべる人、舌の肥えた景観人を養成すべきです。

景観人を養成しながら地域の景観を豊かにしていきましょう。そして行政も景観をたべる人としてのセンスを磨きながら住民と一緒に動いていきましょう。行政の皆さんが、景観を「つくる人」ではなく景観を「たべる人」の眼を持つことから景観行政が進んでいくのだと思います。